

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4792600035		
法人名	社会福祉法人 善隣福祉会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護事業所 中城愛誠園		
所在地	沖縄県中頭郡中城村字当間289-5		
自己評価作成日	平成27年2月16日	評価結果市町村受理日	平成27年6月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/47/index.php?action=kouhyou_detail_2014_022_kihontrue&JizvovnoCd=4792600035-00&PrefCd=47&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 介護と福祉の調査機関おきなわ		
所在地	沖縄県那覇市西2丁目4番3号 クレスト西205		
訪問調査日	平成27年3月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・当グループホームは開所して1年3ヶ月と、まだ日の浅い施設ですが、職員一人ひとりが「私達は入居者様と信頼関係を築き、今出来る事を大切に、笑顔で楽しく生き生きと過ごせる安心、安全な生活を目指します」をモットーに、その家族も含め家庭的な雰囲気の中で支援できるよう努めています。入居者の今出来る事を大切に、職員と共に「家事・掃除・買い物」等を実践して、一人ひとりに適した支援が出来るように努めています。周辺を緑に囲まれた高台に施設があり、入居者は日頃から景色を眺めたり周辺を散歩して気分転換を図っています。また、職員と一緒に気軽に買い物に出掛けたりドライブを楽しむ機会も多く、入居者に喜ばれています。隣接しているデイサービスと交流したり、多種多様なレク活動を楽しみながら体を動かし、いつまでも健康でいられるような支援に努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、緑に囲まれた丘陵地で周辺に民家が少なく、地域交流が厳しい環境を抱える中、同一法人の事業所に隣接して平成25年9月に開設されている。事業所内は、白と茶の色で統一され、台所や畳間、フロアと居住空間を区別した造りで、広く明るい住環境となっている。開設時に職員と一緒に策定した理念は、地域密着型サービスの意義を踏まえて2つの項目で構成されている。その一つの「今出来る事を大切に…」は、利用者自身にも「出来る事は自分で」との思いがあり、それを利用者個別の計画に反映させ、職員もその理念の実践を心掛け、日常の支援に繋げている。また、食事は3食職員が調理し、利用者も食材の下ごしらえや味見、食器洗いや片付け等に加わり、全員で一緒に食事を摂っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目: 9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目: 36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目: 11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目: 30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目: 28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

確定日：平成27年5月19日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員で考えた理念を玄関前に掲げて共有し、常に理念を意識しながら実践に繋げている。	理念は、事業所開設時に職員全員で話し合い、地域密着型サービスの意義を踏まえて作成し、玄関に掲示している。理念の一つ、利用者の「今出来る事を大切にする…」については、利用者個別の介護計画に位置付け、職員間で支援目標を共有して日常生活の中で実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣に住宅が少ないため、日頃から地域の一員として交流するのは難しい。中城文化祭りに参加して作品を出展したり、隣接するデイサービスとの交流を図っている。今後、自治会へ入会して地域との交流を積極的に図っていききたい。	利用者は日常的に事業所周辺を散歩しているが、民家が少ないので地域住民との交流は殆どない。週2回のデイサービス利用者との交流のみである。村の文化祭りに手工芸作品を出展して、村内の見学者との交流の機会を得ている。地域の自治会への加入を検討している。	地域の自治会に加入し、さらに、運営推進会議の委員でもある民生委員等の協力も得て、地域との交流に取り組むことに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現状としては、グループホームの存在自体を地域にアピールできていないため、認知症に対する知識を生かすことが不十分である。その中で、施設見学に来ていただいた方々へ、少なからず支援方法を伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の中で入居者の状況報告やヒヤリハット・事故報告、行事報告、入居者確保に向けての報告を行い、推進委員一人ひとりからの意見や情報を、サービスの向上にいかせるよう取り組んでいます。	運営推進会議は奇数月に、地域関係者や行政職員等が参加して年6回開催している。会議では、事業所の活動、事故やヒヤリ・ハット、避難訓練等について報告している。これまで利用者や家族に対して、運営推進会議への参加の呼びかけが行われていない。	運営推進会議の意義を踏まえ、利用者や家族が参加できるような取り組みに期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の際に事業所の実情を伝えられているが、日頃から密に連絡を取り、協力関係を築くような取り組みは行っていない。施設見学の際に確認が必要な要件がある場合は、市町村担当者に連絡を取り意見を仰いでいる。	行政の担当者とは運営推進会議で情報交換をしているが、窓口を訪問したり、入所の問い合わせがある場合等にも、電話での確認や入所相談等を行っている。村の文化祭りへの出展依頼にも応じ、連絡を取り合って実現させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	過去に玄関の施錠を行っていたことがあるが、現在は「入居者の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体的拘束等を行ってはならない」ケアを実践しています。	運営規定に、「身体拘束をせずに行うケアに努める」と、事業所の方針を明示している。利用者が外に出ようとする際は、利用者の目的に合わせて職員が同行している。家族には面会時等に日常の様子を伝え、リスクを含めて対応への理解を得ている。	

沖縄県（認知症対応型共同生活介護事業所中城愛誠園）

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会には設けていないが、毎月のミーティングの際に、入居者に対しての虐待がないよう話し合い、常に注意を払って防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学ぶ機会がなく、現在は該当する入居者もおられません。将来的に活用する機会があると思われるので、関連資料をいつでも見られるよう、職員の目の届く場所に置いておく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に際しては書類を読み聞かせ、十分な説明をした上で同意を得ている。改定等に関しては、文章を発送したり面会の際に直接説明をして、ご家族の理解・納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱の設置を検討しているが、現在設置していません。日頃から、入居者の要望を聞き入れ、また面会の際に、家族から得られた意見や要望をミーティングで話し合い、今後の運営に反映させている。	利用者の多くは職員に直に要望等を訴えている。意思表示の困難な利用者には職員が声かけをし、把握している。家族の意見等は面会時を聞く機会としており、「歩けないと外出が難しいので歩行の練習をさせてほしい」等の要望を、食前・食後の歩行訓練に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から、気付いた点は管理者と職員で話し合い、運営に反映させている。月1回の職員会議でも、運営に関する意見を出し合い、話し合っている。月2回の法人の連絡会で施設の状況を報告、代表者からの指示や意見を仰ぎ反映させている。	職員は、毎月1回のミーティング時に意見や提案をしている。職員の意見で、担当制を設けたり、加湿器やカメラ等の備品を購入したりして、業務の改善や環境整備に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得の際は給与水準を引き上げ、やりがいをを持たせる等、向上心の持てる職場環境づくりに努めている。一方、業務体制に若干の不安を感じる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の施設間研修が定期的であり、職員の知識や技術の向上を図っている。また、施設外の研修にも参加して、キャリアアップを図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の同業者と意見交流する機会はあるが、外部の同業者と交流する機会に乏しい。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの開始に先立ち、本人やご家族から色々と話を聞き、職員が情報を共有した上で、本人との信頼関係を築いています。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスの導入前に、家族から要望等を十分に聞き取った上で、施設の対応を分かりやすく説明して、安心できるような関係づくりに努める。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスの導入前に、本人や家族から要望などを聞き取り、必要としているサービスが何か、他のサービスの必要性はないか、を見極めて対応するように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、入居者と一緒に掃除、洗濯干したため、食材の下ごしらえ、食器洗い・片づけ等、出来る事は一緒に行き、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には入居者と家族が気軽に過ごせる時間を作り、また近況を報告して家族と情報を共有している。月に一回、ホームだよりを家族の元に郵送して、活動状況を確認してもらうと共に、行事への参加など呼びかけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ドライブを兼ねて馴染みの場所に出掛けるようにしているが、馴染みの人との関わりを保つような支援は出来ていない。隣接しているデイサービスと交流して、同地域の人と触れ合えるように努めている。	利用者は馴染みの病院に通い、自宅近くをドライブで通ることもある。利用者の思いに添ってヤギを見に行ったり、城址へ出かける支援もある。馴染みの店に食材等の買物に出かけている。故郷を離れて利用している方の、故郷への手紙やハガキの投函等を職員が支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	テーブルに座ってウトウトしている入居者に声をかけてあげたり、食事中に居眠りしている入居者を起して摂取を勧めたり、水分補給を勧めたりと声掛け会っており、職員は、利用者同士がお互いを理解し、共に生活ができるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了しても、暑中見舞いや年賀状を送って、関係性を保っている。必要に応じて、本人や家族からの相談や支援に努めたい。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者一人ひとりの思いや希望に耳を傾け、職員は出来るだけ意向に添えるよう支援している。「畑に行きたい」「弟に会いに行きたい」「サスペンスドラマが観たい」等、それぞれに意向は違うが、出来る限り対応できるよう支援している。	利用者は、「出来ることは自分で頑張る」等と思いを直に伝えている。残存機能が低下しないように、利用者自身が「脳トレや歩行訓練」等に取り組んでいる。把握が厳しい利用者の場合は、家族からの情報や日常生活の様子も含めて把握に努め、支援に活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービス導入前に、本人及び家族から、これまでの生活歴等を聞き取り、また日頃の会話や思いで話の中から、これまでの暮らしぶりやサービス利用の経過などを把握するよう努めています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ミーティングや申し送り簿により、一日の過ごし方を把握し、バイタルチェックや観察により心身の状態を把握している。また食器洗い、洗濯干し・たたみ、掃除、食材の下ごしらえ等を実践してもらい、職員は入居者ができる事を把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者一人ひとりに担当をおいて、入居者や家族から聞き出したニーズを職員間で話し合い、現状に即した介護計画が作成できるようにしている。	利用者の個別計画は、サービス担当者会議に利用者や家族、介護職員が参加して、意見や意向等を反映させて作成している。毎月1回のミーティングでカンファレンスに取り組み、モニタリングは6か月毎に実施している。介護計画の見直しは、現在更新時のみに実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々の入居者の出来事を個別記録や申し送り簿に記入して、職員間で情報を共有している。月1回はミーティングを行い、実践したケアの結果や気づき、工夫を話し合っ、介護計画の見直しに生かしている。		

沖縄県（ 認知症対応型共同生活介護事業所中城愛誠園 ）

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診や散髪、身の回りの必要物品は基本的に家族が対応するが、必要に応じて受診対応や散髪の手配、買い物等、柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	中城村の行事、四季の行事、隣接するデイサービスとの交流、法人の行事への参加を通して、安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は基本的に家族が対応しており、本人の身体状況や服薬の状況を受診の際に、家族へ報告している。必要に応じて職員が、かかりつけ医受診を支援することはある。	かかりつけ医は殆どが利用開始以前の医師である。病院受診は、他科受診も含めて基本的に家族で対応している。家族の事情で迎えに出来ない場合は、事業所で対応する場合もある。受診時は介護記録のコピーやメモを家族に手渡し、薬の変更は家族から報告を受けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の配置や訪問看護の受け入れはない。隣接するデイサービスに看護師が配置されており、入居者の体調がすぐれない場合は診察してもらい、必要に応じ受診を促している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には職員が見舞いに行き、家族や病院側との連携を図り、安心して治療ができるよう情報を提供している。また、病院関係者や家族からの情報を元に、早期に退院ができるよう、相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際に、重度化して医療面の比重が大きくなった場合は、グループホームでの生活が困難になることを伝えており、その際は特養などへの入所も視野にいれ、連携を図っている。	重度化や終末期の対応については、利用開始前に「法人内の特養ホームで受け入れる体制がある」ことを家族に説明している。看取りについては、開所間もないこともあり、職員と十分な話し合いがされていないため、事業所の方針も定まっていない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に、法人全体で救急救命の講習会を開催しているが、当グループホームがオープンしてからの開催がなく、応急手当や初期対応の訓練を学ぶ機会がない。急変時には管理者や家族に連絡を取り、早急な対応をこころがけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防職員立会いのもと、日中の消防訓練は実施しているが、夜間の消防訓練は実施していない。地震、水害等の災害の際に、地域との協力体制を築くのは厳しい状況である。	避難訓練は昨年5月に消防署立ち会いで実施している。スプリンクラーや一斉通報装置は設置しているが、設備等の定期点検を行っていない。事故対応マニュアルや緊急連絡網は整備されている。訓練への地域住民の参加がなく、災害時の備蓄がない。	訓練は、昼夜を想定した年2回の実施が義務づけられている。夜間想定の実施も含めて年2回の実施、及び地域住民への参加呼びかけが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉使いや接し方には注意をはらい、一人ひとりの人格やプライバシーを傷つけないよう対応している。	職員は、「利用者の尊厳を大切に」を心掛けている。特に言葉遣いには注意して、「命令口調」や「子ども扱い」をしないことを会議の中で話し合っていて確認している。排泄チェック表は個人名が見えないよう工夫している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「散歩がしたい」「昼寝がしたい」「好きなテレビが観たい」等、入居者が日頃から気軽に希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事の摂取にかかる時間を入居者のペースに合わせて、出掛けたい時に散歩の同行をしたり、一人ひとりのペースに合わせて支援しているが、希望に十分答えられていない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で出来る方は身だしなみやおしゃれを楽しんでもらい、出来ない方に関しては、その人らしい身だしなみやおしゃれが出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の下ごしらえ、もやしのひげ取り、食器の片付け・洗い、テーブル拭きなど、入居者一人ひとりの能力に応じてお願いしている。入居者と職員と一緒に食事をしている。	食事は3食とも職員の手づくりである。訪問時、利用者がニンジンなどを切っている最中だった。献立は、その日の食材の状況に合わせて作っている。利用者も配膳をする等できることは一緒に行い、職員も利用者と一緒に食べている。朝食にパンやコーヒー等が提供されることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量、水分量は毎日記録して職員間で把握できるようにしている。入居者の体調、習慣に合せ食事の分量を変えてみたりと、栄養バランスの確保に努めている。		

沖縄県（認知症対応型共同生活介護事業所中城愛誠園）

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は毎回、口腔ケアを行っている。入居者一人ひとりの能力に応じ、声掛けのみをおこなったり、必要に応じて歯磨き粉を付けて手渡したり、入れ歯を洗浄剤につけて清潔な状態を保ったりしている。歯科受診が必要な場合は、家族へ連絡を入れ対応してもらう。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレの出入り口に排泄チェック表を掛けておき、入居者一人ひとりの排泄パターンがその都度チェックできるようにしている。本人からの訴えや毎食後、夜間帯の定時の声掛けによりトイレ誘導したり、ポータブルトイレを使用したり、オムツ交換する等、一人ひとりの機能に応じて支援を行っている。	排泄チェック表で利用者個々の排泄パターンを確認し、全員トイレへ誘導して排泄の支援をしている。トレーニングパンツの利用者2名以外は綿パンツ使用で、夜間は定時に声掛けを行い、トイレへの誘導を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜中心の食事内容にししたり、水分摂取量や運動を励行したりして便秘の予防に努めている。排泄パターンを把握して、排泄がない場合は、病院で処方してもらった下剤を服用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には週3回、曜日を決めて午前中に入浴してもらっていますが、入居者の希望があれば、タイミングを見ながら対応もしています。身体状況に応じた対応を心掛け、入浴を楽しめるよう支援している。	入浴は週3回を基本としているが、病院受診日や利用者が希望する場合、排泄の失敗時等は随時対応している。入浴は同性介助を基本としているが、勤務上できない場合は利用者に声掛けをして対応している。「湯船に入りたい」と冬場は娘の家で入浴する利用者もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者一人ひとりの生活パターンがあり、本人の好きな時間に休んでもらっている。必要に応じ、声掛けして起きてもらうこともあるが、希望であれば休んでもらう。居室で眠れず、ホールのソファでウトウト休まれることもある。季節に応じ室温に配慮して、気持ちよく休めるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者一人ひとりが服用している薬の効能、副作用、用法・用量を把握しており、個々の内服薬は職員が管理して、処方箋のとおり服用の援助も行っている。薬が変更になった場合には申し送り簿等に記入して、職員間で内容を共有している。症状に変化があった場合には、家族へ連絡している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中で本人が出来る事(家事、買い物等)を実践して、その力を生かしてもらい、気分転換や楽しみで、ドライブやレク活動を支援している。		

沖縄県（ 認知症対応型共同生活介護事業所中城愛誠園 ）

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者一人ひとりの希望に添って外出する事は出来ないが、ドライブに出掛けたり、弁当持参で遠足に出かけたりして、外出の支援をしている。又、入居者の希望があれば、施設周辺や近隣を散歩している。	外出は、週1回は出かけるように努めている。事業所周辺を散歩したり、食材の買い出しに職員と一緒に出かけたりすることもある。毎月全員で季節の花を見たり、道の駅や海などに出かけたりして気分転換を図っている。農業をしていた人に畑を見学させるなど、個別の外出支援もある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ほとんどの入居者がお金を管理することが出来ないため、家族が対応している。ドライブ等、外出の際に入居者からの希望があれば、職員が支援しながら、買い物楽しんでもらう。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	入居者の希望に応じて電話が出来るよう支援している。おひとりは携帯を所持しており、娘さんと連絡を取り合ってる。入居者が書いた手紙は、職員が投函している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設はバリアフリーで採光もよく、食堂からは東海岸を望める。リビングにはソファを設置しており、入居者がいつでもくつろげるようにしている。壁には季節ごとの行事を紹介したホームタよりやスナップ写真を掲示して、居心地よく過ごせるようにしている。	廊下は広めの造りで、両サイドにはスナップ写真を掲示している。居間は広々として畳間もあり、食事用テーブルの他、ソファセットも配置され、居心地の良い空間となっている。テラスに置かれた長椅子で、利用者が景色を眺めながらコーヒーを飲んだりしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングや食堂には椅子やソファ、テーブルが配置されており、テレビやビデオを鑑賞したり、新聞を読んだり、入居者同士談笑したり、思い思いに過ごせるような居場所作りをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際、住み慣れた環境をつくることの重要性を説明して、馴染みの物や使い慣れた物、思い出の写真、記念の品等を持ってきてもらい、本人が居心地よく過ごせるよう工夫している。	居室の窓は二重カーテンとなっている。これまでの生活がわかる写真や空手着姿の写真等を飾っている利用者や勉強机を置いて専門書を読んでいる方もいる。家族の写真やカレンダー、時計、馴染みの椅子等が置かれた居室もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設はバリアフリーになっており、リビング・食堂・廊下・トイレ・風呂場には手摺が設置されており、入居者が安全に移動できるように工夫されている。居室・トイレ・風呂場には入居者が分かりやすいよう表示している。		